第9回青森県漁村青壮年婦人活動
実 績 発 表 大 会 資 料

（昭和43年1月）

青　　森　　県

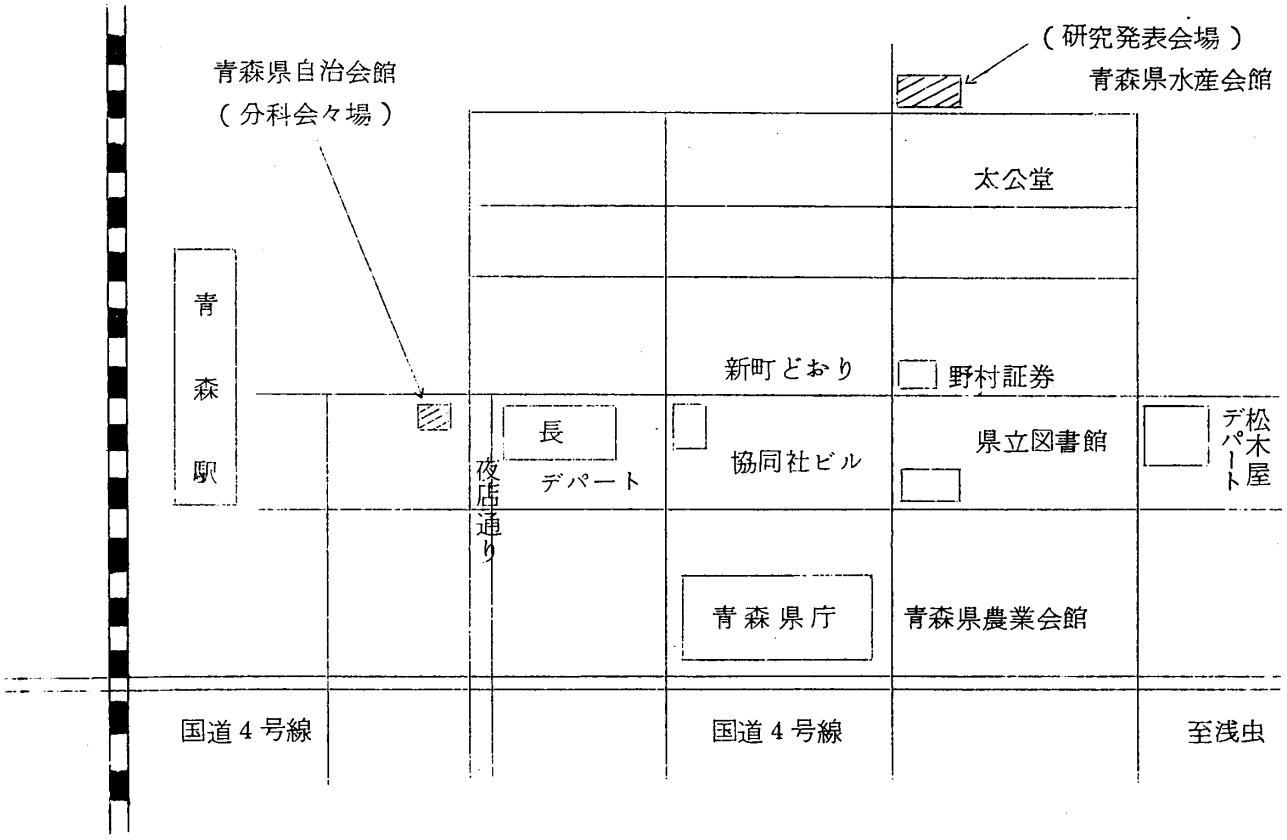
青森県水産業改良普及会

第9回青森県漁村青壮年婦人活動実績発表大会

行　事　次　第

月　日	時　間	行　事	場　所	備　考
1月12日	12.00 ～12.25	開会挨拶	青森市安方町 青森県水産会館大会議室	
		来賓祝辞	仝　上	
	12.30 ～15.30	研究実績発表	仝　上	
	15.30 ～17.00	水産業改良普及会総会	仝　上	
1月13日	9.00～11.00	漁業分科会	青森市新町 自治会館4階ホール	
		婦人部，加工分科会	自治会館3階和室	
		増殖分科会	仝　上	
	11.10 ～11.20	分科会毎とりまとめ	分科会各会場	
	11.30 ～11.40	講評	自治会館4階大ホール	
	11.40 ～11.50	記念品授与	仝　上	
	12.00	閉会	仝　上	

会場付近見とり図



9回　目　次

発表題名	研究グループ名および氏名	部門	頁
1. 潜水板の改良について	大間越漁業研究会 中村重吉	漁撈	1
2. 築石によるいわのり増殖について	佐井村磯谷漁協青年部 東出福一	増殖	3
3. この一年を振りかえって	下前漁協婦人部 成田みよ	グループ活動	5
4. のり漁場の開発を目差して	小湊漁協浜子地区養殖研究会 工藤喜代作	増殖	7
5. うに籠漁法の効果について	奥戸漁協材木漁業研究会 能戸操	漁撈	10
6. こおなご漁法の改良について	三枚橋漁業研究会 岡田哲二	漁撈	14
7. いしなぎ釣漁具の改良	三厩漁業研究会 安保森一		18
8. 私達グループの歩み	佐井漁協婦人部原田支部 東出みつ	グループ活動	21
9. 我が部落における観光漁業の奨来性について	田野沢漁業研究会 山本正一郎	漁撈	23
10. 私達の研究会の活動	脇野沢婦人養殖研究会 須藤きく	グループ活動	25
11. 我が家の生活設計と漁協婦人部活動	泊漁協婦人部 中村およね	グループ活動	27

1. 潜水板の改良について

西津軽郡岩崎村
大間越漁業研究会長　中　村　重　吉

私等の住んでいる岩崎村は延長32㎞の沿岸線に沿って南から北に大間越，黒崎外２ケ字，岩崎，沢辺と４つの漁業協同組合があり，漁業としては組合自営の大型定置，ヤリイカ，ハタハタ等の小型定置，ヤリイカ棒受網，マス流網，刺網と網漁業のさかんなところであります。

これに反して釣漁業は全く不振の状態で４漁協410名余りの組合員の中で実際釣漁業に従事している漁師は20名位よりありません。それも旧式な釣漁業技術であるため漁獲量も少く生活することができないので，他の町村も同じことと思いますが若い青年はもちろん壮年の人でも北海道，関東方面に出稼ぎに行き冬期に失業保険で生活している現況です。

今まで当村には研究会といえば沢辺部落にだけよりありませんでしたが，昭和40年より岩崎村に漁業改良普及員が駐在になり，普及員の指導により，私等の大間越部落，板貝に僅か５名の会員ではありますが，昭和41年11月20日大間越漁業研究会を結成いたしました。

私等の研究会は大間越部落から南に７㎞程の青森県と秋田県の県境にある板貝にあり３戸よりない辺地で断崖，絶壁が多いので田や畑は殆んどなく漁業１本で生活しております。網漁業は資金がいるので釣漁業を専業としております。時には共同で小型定置もやります。

春の３月よりマス１本釣が始り４月になると共同でヤリイカ小型定置をやり５月中旬小型定置を切揚げ後，テングサ，ワカメの採取をしあいまにブリ1本釣を操業，７月になると夏アワビを採取します。これは８月いっぱいで終り，９月から本格的なヒラメ１本釣を操業し12月から１月のハタハタの漁期だけ休み２月も操業します。この頃になると日本海特有の季節風が強くなるのでなかなか沖に出る凪がなくなります。以上は私等の１年中の操業状態ですが，沖に出た以上は生活できるだけの漁獲をあげなければならないので普及員の指導により１本釣，曳釣漁具の改良に重点をおき，先進地漁業技術資料を参考とし，当地に適した漁具の製作，研究に力をいれております。

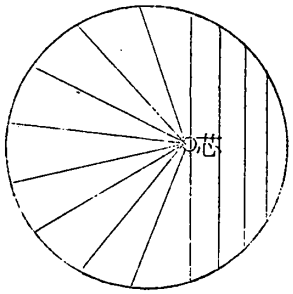
次に私等が改良して現在使用しているヒラメ１本釣潜水板を紹介いたしますが，いくらかでも皆さんの参考になれば幸と思います。

潜水板の作成について

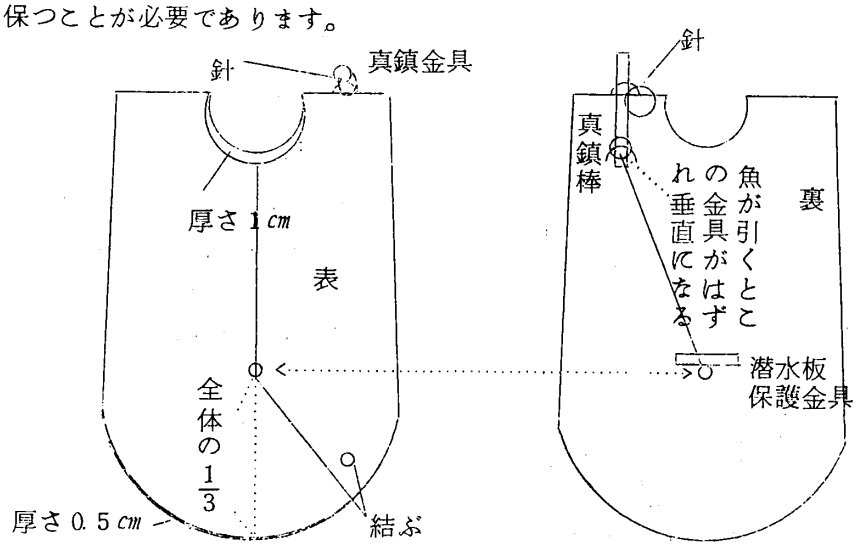
潜水板は１本釣，曳釣にとって一番大切なものでありますから使用しているものは全部自分で作製しております。現在各地の釣具店でも潜水板を販売しておりますが経費の点で半分ですみます。

潜水板をつくる材料のとり方はA図のようにとらなければ潜水板として使用した場合振れが生じて水平になりにくい。常に水平を保つことが必要であります。

（A　図）



木の種類（うるし）



釣　り　方

道系は20号で15mおきに目じるしをつけるようにする。

深さに応じて使用する潜水板をきめておく。船の早さは2～25ノットの速力で操業し，釣れた魚の大きさによって潜水板の深さがわかります。

大きい魚の場合潜水板は海中の上層であり，小さい魚の場合は潜水板は下層であるから道糸でかげんして上層部をひき大きい魚を釣るようにする。

今までの潜水板であると魚が喰いついた場合容易に引き揚げることができなかったがこの潜水板になってからは魚が喰いつくと金具の装備により潜水板が垂直になるので手ごたえが軽くなり魚の喰いがすぐわかり，また引揚げるにも簡単にあげられるようになった。

私等の使用している潜水板は「うるし」の木を使用していますが水分を吸収して潜水板がくるってしまうことと，海底の岩礁に引っかけた場合先がいたんで操業上マイナスの点が多い。

現在科学の発達によりプラスチック板のあることをきいているのでこのプラスチック板を求め潜水板をつくりたいと思っているがこれがみつからず困っておりますので皆さん方のなかでプラスチック板の販売先の御存知の方がおりましたらお知らせ下さるようお願いいたします。

次に私等の使用している潜水板の深さによる種類をお知らせいたします。

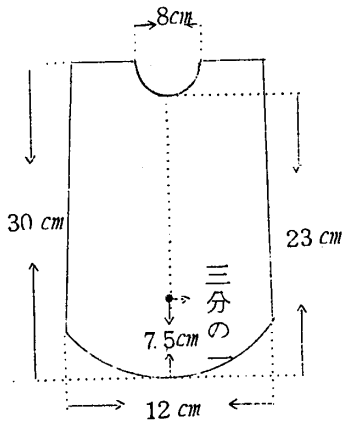
第一図の潜水板では深さが17mにたいして，24m位道系をのばす。

第二図の潜水板では30mの深さのところを釣るには，45m位道糸をのばす。

第三図の潜水板では45mの深さで釣るには，90m位道系をのばす。

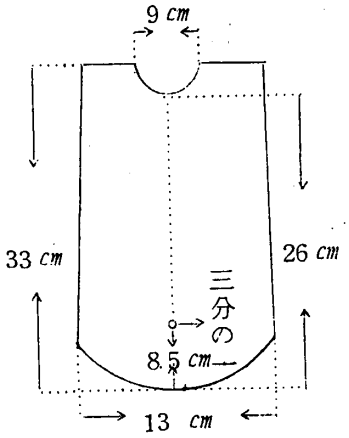
第二図，第三図の潜水板では，はりすの方は2m位長く使用しなければならない。

第一図



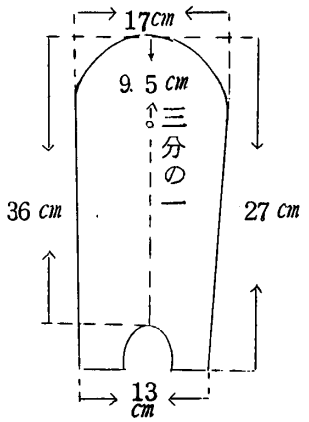
深さ17cmのところで使用する
潜水板の厚さ
　先の方　　5mm
　本の方　　10mm
道系は24m位のばす

第二図



深さ30mのところで使用する潜水板
道系を45m位にのばす潜水板の厚さ
　先の方　　5mm
　本の方　　10mm

第三図



深さ45mのところで使用する潜水板
道系を 90 m位にのばす

潜水板の厚さ
先の方　5 mm
本の方　13 mm

以上私達大間越漁業研究会が発足して満1年になり何の研究の成果もあがりませんでしたが，今後皆さん方の御指導をいただき研究会として何等かの実績を残したいと考えておりますので何分よろしくお願いし，私の研究発表を終ります。

2. 築石によるいわのり増殖について

佐井村磯谷漁協組青年部　東　出　福　一

下北半島の津軽海峡に面した私達の村では，夏期間は比較的水産物にも恵まれ安定した生活を送ることが出来ます。冬期間に入ると北西の季節風に悩まされ，出漁日数も少なく「ヒラメ」の一本釣が主であって，漁船だけの収入では生活が苦しくなります。

だが，こうした苦しい冬期間中に「いわのり」を養殖することによって収入を得ていることは，幸いとするところであり，また欠かすことの出来ない実状であります。

そこで私達青年部では，この「いわのり」の水揚げを増して冬期間中の生活を安定させ，苦しい生活状態を打開しょうと去る昭和35年から「いわのり増殖」について研究実習してきました。

当時，「いわのり養殖」の先進地であった下北郡風間浦村蛇浦へ3名の視察を送り「クレモナのり網」による養殖を学びました。そして35年1月18日に，21ミリの「鉄のボルト」を岩に打ち込み網を張って養殖を始めました。しかし，時季が遅れたためか，それとも胞子の付着技術の欠陥か，その年はいわのりを見ることが出来ませんでした。

果して，冬期間の荒波に養殖施設が耐えることが出来なかったのか，それとも養殖技術に問題があったのか話合ってみました。しかしこの不成功に関する結論を見出すまでには至りませんでした。

私達はこうした問題を持ちながらも，翌年また「いわのり養殖」に着手したわけです。結果としては，荒れた日が少なかったのと，会員の養殖技術の研究が実を結び，張った網に「いわのり」を見ることが出来ました。自然岩と比べてはるかにすぐれた生育ぶりを見て成功感を味わいました。がそれも束の間，2月下旬の大波のため網は流されてしまいました。でも，なんとかして成功させようと再度の失敗にくじけず，37年，38年の2年間にわたって施設の改良に専念しました。

しかしながら，高波と「海草（ゴモ）」のため私達の努力はみのらず，試験区域は「いわのり」の養殖には不適であるということがわかりました。

けれどもこの2カ年にわたった研究実習の結果次のことがらを学びとることが出来ました。

37年に技術改良の面から「セメント塗布による養殖」を始めたところ好い成果を上げることが出来たので，網養殖法を打ち切って「セメント塗布」に切り替えてしまいました。ところが此の方法によれば，初

年度は良好であっても翌年からは雑草や貝の付着があってのりの生育が悪く，自然岩ののりよりも収獲量が著しく減少するという点更にこれらの障害を除去しようとすれば，毎年セメントを塗布するか，岩の掃除除をしなければならないこと即ち，費用と労力と収入の均衡がとれないということでした。

養殖研究に入って五年余，期待していた収入も得られず途方に暮れていた時，ちょっとした思いつきで始めたのが現在の「築石による増殖法」なのです。

動機は，私達の試験場（㊟佐井村漁協組より試験場として指定され一般漁民は採取を禁止されている区域）へ行く途中佐井村林道工事現場があったわけですが，そこを通った際，海岸にころがっていた岩石に真黒な「のり」を発見したのでした。

そこで岩肌の見えない満潮時でも，浅瀬にこの岩石を置き，いわゆる人工岩礁を作って「いわのり増殖」を始めようと，41年の事業として強力に進めていきました。しかし，計画と実践はなかなか一致しませんでした。

例えば胞子の繁殖時期でも出漁しなければならないこと，また自然の条件（天気波）に左右されて思うようにいきませんでした。でも，過去に実施した網養殖，コンクリート養殖等で良い成果を納めることが出来なかった体験をかみしめ，是非，今度の築石養殖を成功させねばという意気込みをもって，8月15日，お盆休みを利用して事業を行ないました。

船で道路付近の岩石を試験区域まで運び，その岩石が移動しないようにコンクリートで固め，1日がかりでどうにか2坪位作ってみました。

この仕事で苦労したことは，コンクリートで岩石を固定させる場合でも岩石の表面積を大きくして，苔の付着層にすること，また満潮時でも岩石が少し見える程度にすることでした。

こうした作業を終えた私達は，冬の訪れが楽しみでした。　それから3カ月。　11月に入って試験場に「いわのり」が生育していること。そして42年の春までに数回採取しました。42年8月には，セメント1袋で約4坪の築石を作りました。昨年の築石，そして今年新設した築石は共に良好な経過をたどっています。

今年は1回の収穫で乾燥のり，100枚前後，金額にして1万円程度の収入を得ました。

ふりかえってみると7年間の研究でした。

私達の先輩が，そして現在私達が研究努力した結果が実を結んだのです。

波が荒く「網養殖」に失敗し，雑草より生えない浅瀬でも，一度の築石で数10年も手入が不要な「築石によるいわのり養殖法」が最適だと思っています。

3. この1年を振りかえって

下前漁協婦人部　成　田　み　よ

私達の住んでいる下前は青森県西海岸の北部，日本三大岬の1つと言われる権現崎の中程にあり，本村の小泊とは約2㎞はなれています。南に面しているため，洋上遠く岩木山や十三湖が美しく望見され，又権現岬頂上からは大島小島や，北海道も見られるなど，県立公園としての面目を誇っている所であります。戸数320，其の殆どが漁家であり漁業で生計をたてている漁村であります。道路幹線からは1.5㎞も奥まったところにある関係上交通の便が悪く，冬期間などは陸の孤島といった状態におかれているところであります。最近ようやく本村の小泊からバスが通うようになり外来者も逐年増加しているようですが，それまでは何となく世間から忘られた存在のように思われていました。しかしながら漁業構造改善事業が実施されるに及んで私達にもようやく光りが当るようになり，本村の小泊とならんで日本海北部における漁業の一大拠点になるための施策がたてられ，特に下前は構造改善事業のパイロット地区（県単独補助事業）としての指定を受けてからはここ2～3年の間に見違えるようになって参りました。漁港の施設整備と共に漁船が大型化され，隻数も増加して現在の港ではとても収容しきれない状態に発展して参りまたした。したがって，漁協の水揚高も3年程前の1億3千万円から現在では2億3千万以上になっており，ますます増加するものと考えられています。漁業はいか釣が殆んどで，いかに明け，いかに暮れるといった状態であります。

私達婦人部が結成されたのは一昨年の12月でしたのでやっと1年経ったばかりであり，実績発表など申上げられるほどではございませんが，この1年を振りかえって見て，漁協婦人部としてこれでよいのか悪いのか，将来どのように改善すべきかわからぬことが多いので，この1年間の歩みを申上げ皆さんの御指導を得たいと思います。

1. 婦人部結成について

私達婦人部の組織形態は下前婦人会，即ち，漁協婦人部の格好をとっています。これは結成に当って婦人会員はもちろん，いろいろの人の意見をきき会合を重ね，この人里離れた孤立した部落で，かたや婦人会，かたや婦人部，或は何々会など数多くあっても婦人の感情のもつれからお互いに対立して部落の平和を乱すようなことがあってはならないとする配慮から取上げられたもので，性格的には弱い感がないでもありませんが，しかし現在では何らの支障もなく会員数も当初の220名から270名を増加し，ささやかながら明るい歩みを続けているものと信じています。

事業計画も初年度であるため漁協とも相談し合い，又改良普及員の指導も受けましたが以下実施の経過についてご説明申上げたいと思います。

2. 環境改善作業について

これは明治100年事業として，又婦人部結成の記念としての意味もかね，部落の学校，神社やお寺の周辺と，岩山をよじのぼり権現岬の頂上付近に合せて百本の桜の植樹を行ないました。この作業には全員に近い会員が出役し，この秋の根払いや兎害から防ぐ手入作業も行ないましたが，枯死したもの全く見られず良好な発育をなしているようで数年後にはこの荒磯の岬にも美しさが加わるものと楽しみにしているところでございます。

3. 若妻会の結成指導について

とかく僻地の農漁村には昔ながらの封建性が残っているといわれ特に下前のような僻地にくるお嫁さんなどは何らの楽しみもないと解され勝ちですが，これ等を解消する為に私達親達が現代に即した理解ある態度が望ましいものと思われることからしてもこの結成を指導したもので，これは婦人部員の若干のお嫁さんだけのグループで親ごさん達がこの嫁さんの為毎月貯金をしてやり，これによって研修旅行されたり各種の集会費にあてさせるなどよい嫁さんづくりに一役買ったもので現在ではこのグループは

50名程になっていますが嫁，姑のいさかいなど全く聞かれず，よい嫁さんづくりというよりは，よい姑さんづくりと二重の効果があったように解されています。

4. 貯蓄思想の向上について

これは県の貯蓄推進委員会から貯蓄実践地区として指定も受けたことから婦人部結成と同時に始めました。漁協への預け入りのものは婦人部で取りまとめ整理し，親通帳1本で行ない，なるべく多忙な漁協の手間をはぶくようにしましたが，会扱いのものはこの1年間の貯蓄高は郵便貯金も含め百万円近くになっています。とかくいか釣りのような漁業はとればとったで乱費になりがちですので幾分でも貯蓄思想の向上につとめ，不時の出費に備える心構えをもって頂きたく指導しているものでございますが，しかし無理な貯蓄は行なっていません。

5. いわのり場の清掃について

下前は磯浜であり約3㎞の海岸には相当のいわのりが附着し，冬期間婦人方の小づかい銭かせぎの収入源ともなっています。これまで一度も掃除したことがないので雑藻の附着が目立っていましたので漁協とも相談し，9月にこの岩のり場の清掃を行ないました。これは普及員の指導によってカセイソーダで清掃したもので，，時あたかもいかの大漁の時でしたので出役人員があまりないのではないかと懸念されましたが100人以上も出てくれましたので短時間で仕上げることができました。試験的に約500アール程の面積が清掃されましたがこの冬はのりの附着が大変よく其の成果の大きいのには皆驚いているようであります。したがって本年はもっと広面積の清掃が話合われているところであります。

6. サークル活動の展開

下前部落では3年程前からサークル活動を行なっていますが婦人部結成と共に内容を一層充実させるべく努力しています。このサークルは部落6ケ班に分け，各班毎に毎月3回程度の集会をもつことで場所は各班毎に個人の座敷をかりたりしますが，男も女も老人も若者もこれに参加します。お茶を呑みながら育児の話や，子供の勉強のこと，躾のこと，家庭環境の改善のこと，家計簿などがよく話題になります。又時には下前部落の発展に話がはずんだりしますが，時として何も話題がなくて世間話で終ることもあります。しかし集会のくせをつくる為にはそれでもよいと思っています。話合いの中からわずかながらでも前進の方向をたどっているようであります。講師としては小中学校の先生や社教関係の人，或は村の有識者の方々にも出席していただいており，今後は漁業や農業関係の方にもきていただき内容を一層充実させたいと思っているところでございます。

7. 視察研修，各種講習会について

8月には会員が全員参加し待望の岩木山スカイライン見学にでかけました。晴天に恵まれ岩木山の頂上からはるか北方に権現岬をながめ，私達の部落があんなところにあるのかなど感慨深げでした。又10月には三戸郡の田子町にナメコキノコの栽培の研修に出かけましたが，これは夏期間よく霧のかかる権現岬のカン木林内では10分成功の可能性があるように思われましたので今春には試験的にこれに取組む計画でおります。

又講習会としては県農務課のご指導によって漁村における健康食事の作り方，又県社教講師による漁村婦人のあり方の講習会等が開催されました。又県主催による漁民体育づくり運動会が小泊で行なわれましたのでこれにも積極的に参加しましたし，地元漁協主催の漁民運動会にも協力いたしました。

以上何かにと申上げましたが42年度の事業計画は会員の協力によって全部消化することができました。当初の予算計画は20万円程度で，収入源としては婦人会当時の繰越金，年金の集金手数料，漁協及貯蓄推進委員会からの助成金などであります。

何せ始めてのこととてこれでよいのか，悪いのかわかりませんが，ただこの活動そのものは漁村婦人の勉強の場であったことはかわりないものと思っています。

皆さんの御指導御助言を得たいと思っています。

4. のり漁場の開発を目差して

小湊漁協浜子地区養殖研究会
工　藤　喜代作

小湊湾に於けるのり養殖も今年で12年目を迎えましたが，度重なる水害と河川工事等による泥の流出によって漁場は年毎に浅くなり〃潮通し〃は悪るく，よごれは一層ひどくなるばかりで，数年前から私達の養殖する種網さえも自給出来ず，福島県松川浦はじめ宮城県松島湾，又県内の大湊，野辺地より毎年のように買網或は委託網に頼りばく大なる経費を投じてのり養殖を行っている現状であります。この12年間の歴史をふりかえって見ますと養殖状況，生産などの推移は第1表に示すとおりであります。第1表と私達の経験から小湊のノリ養殖は，2つの時期に分けて考えられます。第1期は，昭和31年から35年の5年間でのこ時期は発展期と考えられます。この間波浪による被害もありましたが種苗は自給され病実も少なく昭和35年においては生産者の数は185名，網数は2,702枚，生産枚数は372万枚に達し金額にして2,237万円であり小湊漁協の重要な漁業に発展しました。次に第2期としては昭和36年から40年の5年間が考えられます。この時期は停滞期と見られますがこの間は漁場の拡張，網数の急増を示しましたが地元採苗の不振で県外種苗に依存し密殖による病害の発生などから生産は不安定かつ減産傾向を示し，このため養殖を継念する組合員もありました。この間ノリ養殖振興のため防波柵，人工採苗場，施肥船などが設置，建造され大きな対策が行われましたが思うような増産を示さず過ぎて来ました。現在もなお採苗不振，県外種苗そして病害，密殖などの問題は残されておりますが漁場管理面，新技術の導入（冷凍網）などにより一つの転換期のように思われます。ノリの豊凶は，天候　海況などにも左右されますがノリの漁業者としては網の管理および漁場管理が大切な事はいうまでもありません。そして種苗の良否が最も大きい問題かと考えられます。ここで小湊の種苗についてあらためて考えてみたいと思います。前に説明致しましたように第一期においては良い種苗がとれていましたが，第二期においては松川浦の種網が2,000枚から3,000枚以上も購入移殖されています。松川浦のものはノリそのものは良質で生産時期も早いのですが種網は毎年すべての網が良いという訳ではなく，芽付不良，青ノリの着生などから生産不能の網もあり第二期においては松川浦種苗の良否が生産を左右する状態でありました。このようなノリ養殖の不振を少しでも回復したいと言う考えから浜子地区のノリ漁業者十人の人達で昭和40年研究会を作りノリ，ワカメ養殖を主体として研究する事になり，そして会合の場合には陸奥湾水研の三木専技，金沢技師，平内町担当の秋山普及員にも度々出席をお願いし，研究会の活動方針（研究課題）についてご相談し，先ずノリ採苗を重点に浜子地先の開発について陸奥湾水研とタイアップして研究致しました。その経過について説明致しますが私達の研究は2年目で経験も浅く発表する事は早いと思いますが皆様の御批判を頂きたいと存じます。

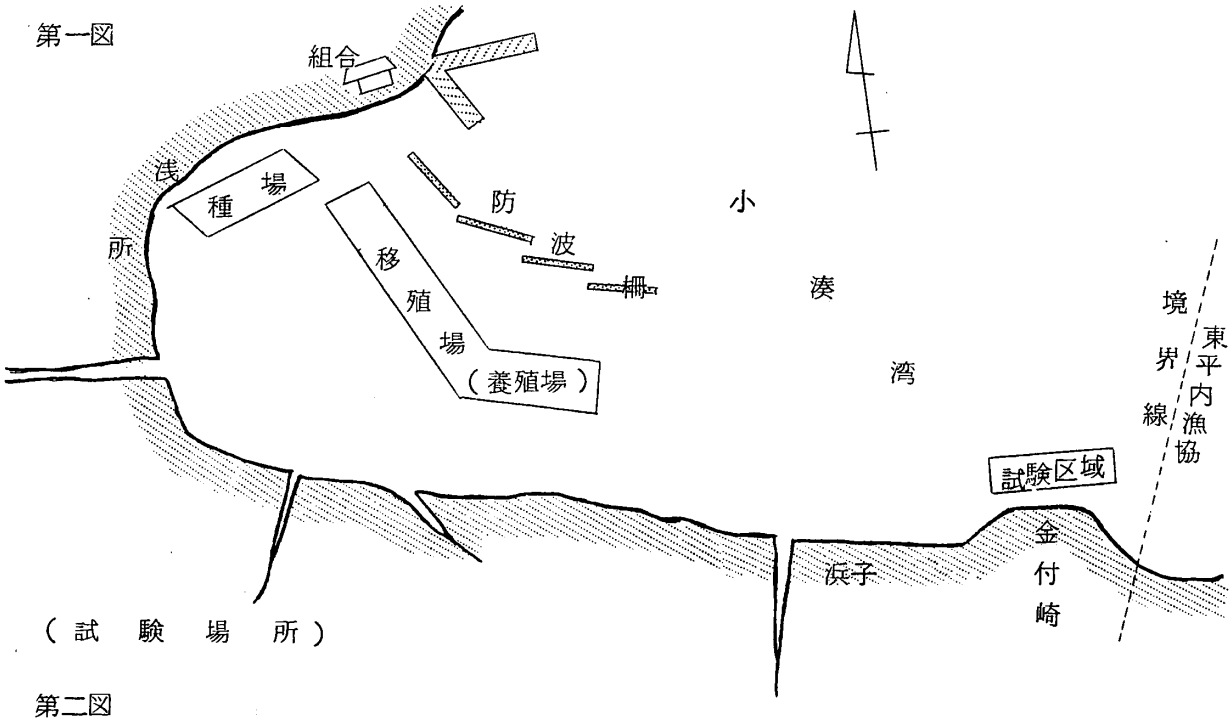
浜子地先は第2図に示すように小湊湾の東側にあってやや遠浅の場所が海岸線に沿ってみられます。試験場所は第2図に示す金付崎の附近で小湊湾の湾口に位置しており，東平内漁協との境界に近いところで干潮時の水深は1米内外の遠浅な場所で底質で岩盤（甘盤）であります。次に1年目の経過と標柱の設置と段線観測でありますが，9月17日会員全員で採苗に最も大切な標柱を立て段線の観測を行いました。段線の観測決定は，水研の指導により浅所の段線を観測し乍ら浜子に連絡し水位0センチメートルから100センチメートルまで10センチ毎に目盛を付けて図に示すように段層試験を行いました。採苗の場合網の張込層をノリの附着層に合せることが大切でこのためノリがどの水位によくつくかを見る必要があります。

水研の援助により9月17日および9月30日の2回，1間網を各々四枚重ねにして30センチから70センチ層の5段に張込み，その後の状況を観察しましたところ，9月17日張込みものは40センチから60センチ層にノリの附着がみられ特に50センチ層が生長も良く11月下旬には10センチ位に生長しました。それから野外人工採苗試験も併せて行い，段層試験と同じ日にクレモナ網5枚重ねにして3柵，張込層は50センチ層にして1柵に付き提灯型採苗器約15個糸状体貝殻30枚を使用し，支柱は太さ15ミリから18ミリの鉄棒と1部竹を使用しました。9月17日張込みあみは10月上旬には肉眼的なノリ芽がかなりみられていましたが10月13日の集中豪雨の流出物が網にかかり竹は折れのり芽はかなり脱落していましたが，会員の熱心な手入と管理により約1ケ月後の10月上旬には5センチ位に生長したのりが密生し，被害を受けた部分も糸が黒くなり，ノリ芽がみられ12月上旬には浜子地先および養殖場に分散して1枚張とし会員各自が管理養殖しました。9月17日張込あみは12月中旬から摘採が始り9月31日張込みあみは12月中旬から摘採が始りそれぞれ4月下旬までの間4回から6回の摘採が出来生産数量は網1枚当り1,400枚から2,500枚でかなり良質なノリが生産されました。以上1年目の経過から，1.支柱は鉄棒を使用した方が良い。2.張込層は50センチ層が良かった。3.ノリは根丈夫で色沢も良く芽付き生長共に良好で病害に強くかなりの生産を得た。このように1年目としては予想以上の成果を得種苗生産に明るい見通しが得られました。そして3月下旬には水研の出席を頂き1年目の結果について反省会を開き，試験の結果について組合に報告致しました。次に第2年目の経過について申し上げたいと思います。第1年目の結果から網数の増加が予想されていましたが8月下旬水研と打合せを行い，漁場計画，資材，採苗網の予想枚数などについての検討し特に漁場計画と会員各自の研究結果を討議する方法を取上げました。現在までの経過の概要を説明致しますと早期摘採をはかるため9月10日に早張3柵（17枚）と適水温とみられる9月18日から9月16日頃までに約100柵網枚数にして約550枚の張込みを行いました。採苗は主として糸状体使用による野外人工採苗で特に1柵は5～6枚重ねにして鉄棒使用，潮通しに充分注意して区画しました。全体の網数は予想を上廻り昨年の10倍以上にもなったが採苗結果は極めて良好で芽付不良の網はあまりありませんでした。採苗状況について若干補足すると9月10日張込あみは約1潮（15日）後には肉眼的大きさに達し生長が早く11月5日に初摘採が出来12月12日には3回目の摘採が出来，計約1,600枚を生産し今後数回摘採出来る見込みで，小湊ノリ漁場始まって以来の好記録だと思います。又9月中旬から下旬にかけて張込網は11月下旬より摘採可能となり現在までのところそれぞれ網1枚当り800枚から1,100枚位の生産を示しています。一方松川浦の種網は芽付不良のものや又11月上旬よりくされが発生して生産不能となり陸揚げした網数は1千枚近くにものぼり相当の減産を示しています。又本年度の浜子地先に於ける採苗管理は3日から5日間位低張りにして生長を計りその後又3日から5日間位高張りにして健苗を計る方法をとりましたがこの管理方法は低張りだけ或るいは高張りだけの網より生長，色沢もよく一応浜子地先に適した方法のように思われました。以上2年目の経過では現在のところ採苗も好結果で今後のノリ養殖に明るい希望を持つことが出来，非常に喜んでいる次第です。最後にまとめと問題点を取りあげてみたいと思います。私達研究会が陸奥湾水研の指導を得て新漁場の開発を目指して研究して来ましたが結果をまとめてみますと，1.浜子地先において採苗適地を開発しノリ養殖に明るい見通しが得られた。2.張込層は50センチメートル層が基準線と考えられる。3.漁場の地形，地質に合せ，支柱は鉄棒或るいは鉄管等使用する。次に問題点としては密殖により漁場価値を失うことは絶対にさけなければならないので漁場計画が今後の大きな課題であると思います。私達研究会は現在の成果に安心することなく更に努力と研究を進める考えでおりますが今後共皆様方の一層の御指導をお願い申し上げまして私の発表を終ります。

第1表（養　殖　状　況）

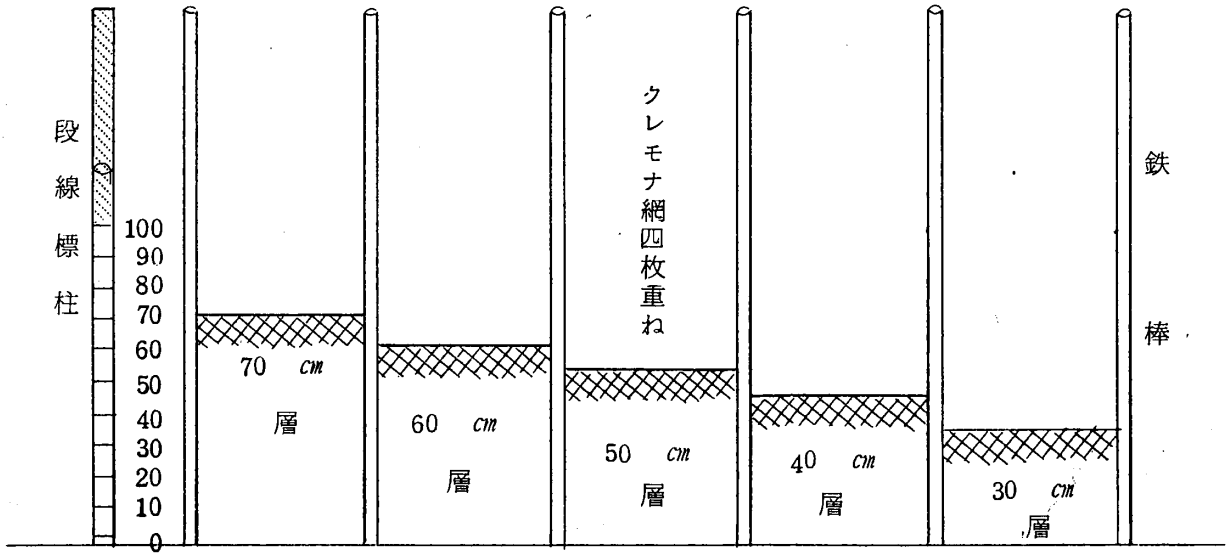
年度	養殖者数	網枚数	生産枚数	生産金額
31	4名	300枚	15万枚	90万円
32	11	600	55	447
33	68	2,200	93	509
34	95	26,000	232	1,623
35	185	2,702	372	2,237
36	205	3,887	76	443
37	197	5,028	151	1,225
38	184	4,061	14	168
39	164	2,969	67	799
40	153	2,792	149	1,853
41	150	2,759	102	1,140

第一図



（試　験　場　所）

第二図



段線標柱と段層試験（のりの附着試験）

5. うに籠漁法の効果について

奥戸漁協材木漁業研究会
能　登　　操

私達の住む大間町字材木は本州の最北端大間崎から西南海岸づたいに約8㎞の所にあります。戸数48戸人口300の小部落で奥戸漁業協同組合に所属しています。

魚船は動力船3トン以下が43隻，無動力船が42隻でこんぶ，わかめ，天草等を採取し，又漁期によっては，ひらめ，ぶり，すずき等の1本釣りにも従事しています。

その主なる漁業はこんぶ採取で年間約30万円の収入を得ています。

耕地は水田に恵まれ1戸当り3反から多い家では1町歩，又畑は3反から5反となっています。

作物は米作りの他馬鈴薯，菜種，大豆等を耕作しています。農機具はハンドトラクター20台，脱穀機8台があり省力化に役立っています。

以上のように私達の部落は純然たる半農半漁の型を示しています。

年間収入のうち6割が漁業，4割が農業によりますが，冬期間の12月から3月迄は特有の季節風が強く農閑期でありながら出漁不能の日が多いため遠く関東，関西方面へ出稼ぎに出る人も多くなっています。

私達漁業研究会員はこのような環境にありながらも何んとかしてより良い生活基盤をつくるためにはどうしたらよいかと時々集っては話し合いをして参りました。またまた佐井村へ所用のため出張された和田清一郎さんが，うに籠漁法を聞きこれならばなんとかやれると云うので早速試験操業にとりかかりました。その結果はものの見事に成功しました。

これを見た研究会員はもちろんのこと部落の人達は我も我もとこのうに籠漁法をとり入れ，たちまちのうちに部落全員に普及しました。それ迄のうに採取は，昔ながらのほこ突漁法で，1個1個突き取りしていて，一日中の操業でも40Kから50Kが，せいぜいだったのみならず量的なまとまりがないため，販売するのも一部で，其の大部分は自家消費されていました。

又，農繁期になれば誰一人として見向もしない漁業でありました。奥戸漁業協同組合の決算報告書の中でも，今迄はその他の課目で処理される程度より水揚げがなかったように思います。

うに籠漁法が急速に普及したのは次のような利点があったためと思われます。

1. 農繁期でも操業ができる。
2. 資材費が安価である。
3. 漁具の製作が簡単である。
4. 操業が容易で時間を多く要しないこと
5. 漁場が近いこと及び漁場の選定が容易なこと
6. 餌の入手が容易であること

等であります。

私達のうに籠漁法によるうに漁獲高にしげきされて本村の奥戸でもこの漁業に着業する船が15隻を数えるようになりました。

奥戸漁業協同組合の調べによれば昭和42年中水上げされたうにの数量は98,360K，金額にして6,849,100円，着業船60隻となっています。

今迄はあまり重点をおいていなかったうに採取漁業もこの漁法の導入によって一躍日の目をみるようになりました。漁期の盛んな時は一籠に最高30個も入っていることもあるが，平均して7個から9個位であり，重量にして平均1kgは入っています。

月別うに漁獲高及び単価は表1のとおりであります。

昭和42年月別うに漁獲高（表1）

月	漁獲数量	金額	平均単価
3	14,760	1,616,900	109.50
4	13,770	1,326,600	96.30
5	4,090	189,900	46.40
6	7,820	245,500	31.40
7	35,880	1,451,300	40.40
8	2,130	91,800	42.80
9	9,310	787,400	84.40
10	10,600	1,139,700	107.50
計	98,360	6,849,100	69.80

以上のように3月から10月迄の操業で動力船1隻2人乗りで最高50万円，最低15万円は漁獲されています。この間農耕あり又こんぶ採取もありましたが新しい漁法の採用で今年は特に忙しかったが収入の増大したことは大きなよろこびでありました。

漁　具

うに籠は図1のように針金8番線160cmを50cmの輪に作り，網は2寸目～2寸5分を40目から45目使用します。長さは1籠30cmで一方を輪に通し一方は中央で束結します。

つり糸は綿糸30号を各々40cmとして3方からつるようにしその先端の桁縄へ結着する部分を40～50cmつけておきます。

重りは自然石50匁位のものを籠のうら側中央の底へつけます。

以上のような簡単なものであります。

操　業

操業は図2のとおりでありますが，あらかじめ用意した餌（サルメン・コンブ・ワカメ等）を籠の中央に結びつけてから桁縄に3m間隔で結着して延縄方式で仕立てます。

漁場は水深15mから30mの間で海藻の少い平盤又はごろだの場所でも凹凸の少い場所を選定します。

漁場の選定が終ったら先づアンカーを投入し潮上から潮下へ順次うに籠を入れ最後にアンカを投入して設置を終ります。

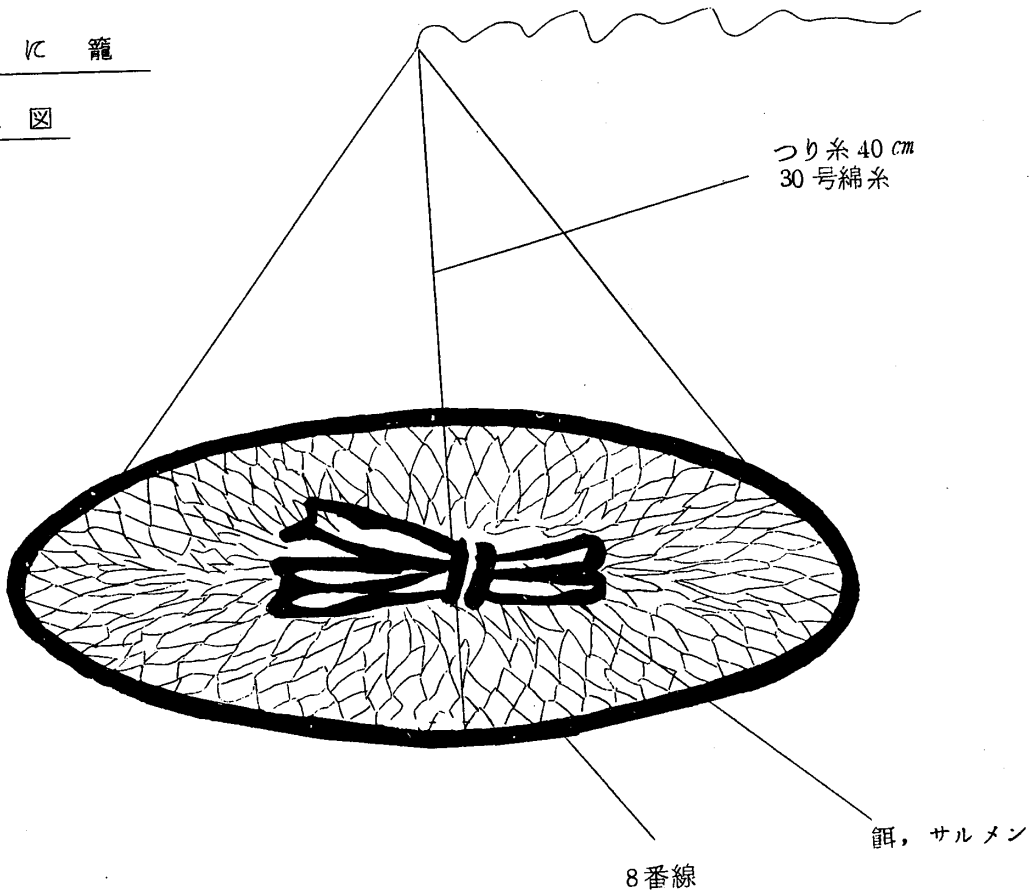
翌朝から朝夕2回うにの漁獲及び籠・餌の点検を行ないます。

餌の損傷のはなはだしいときは予備の籠と交換するか餌を付け換えます。以上のような操作の容易な漁法であります。注意すべき点は籠がひっくり返らないようにしなければなりません。

むすびとして私達研究会員は従来行ってきたうに漁業から急速に漁獲の増大した新しい漁法を採用したことは大きな前進であったと思っています。私達はこの経験を生かしあらゆる面での研究改良に努力する覚悟でありますから今後共皆様の御指導をお願いして私の発表を終ります。

うに籠

立体図



側面図

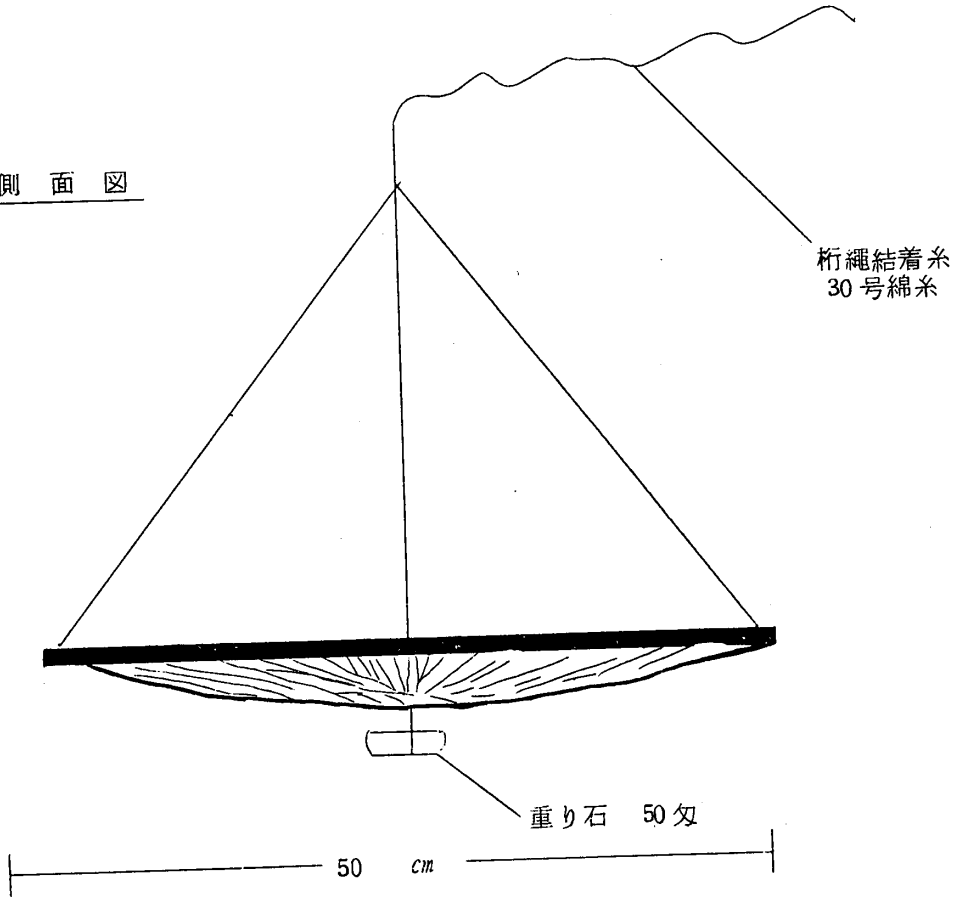
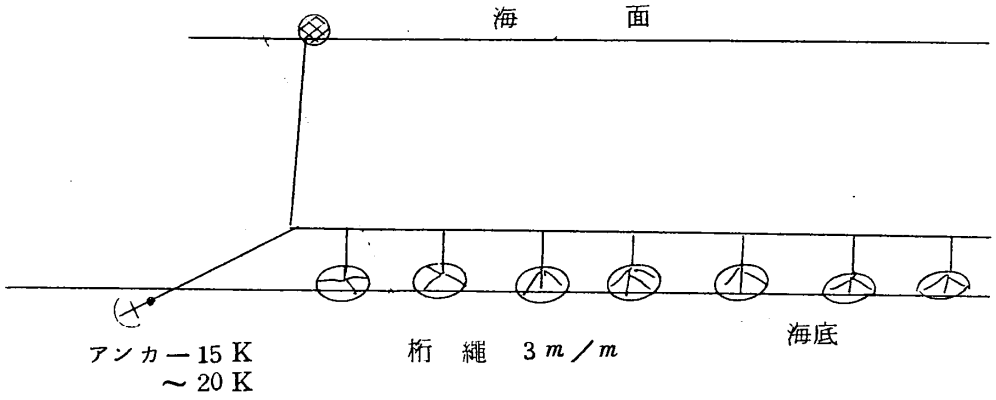
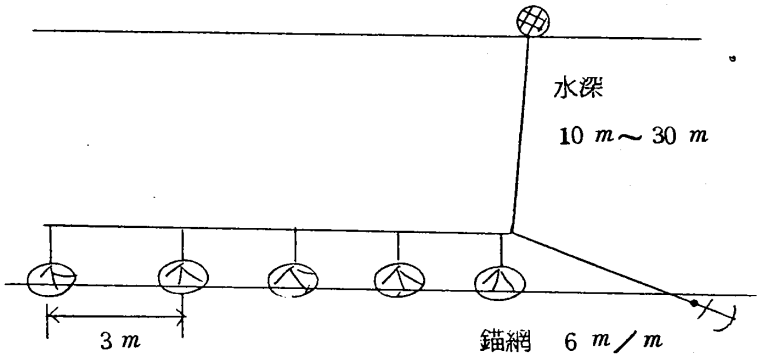


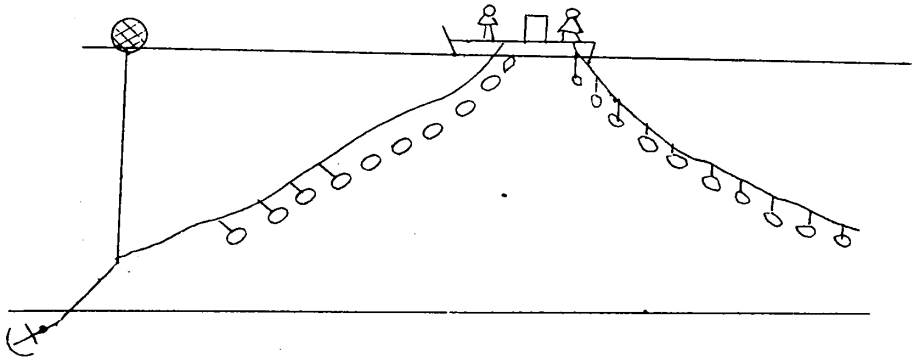
図 2

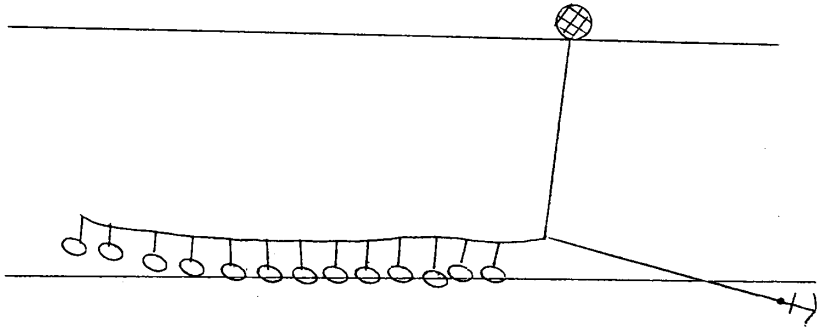
うに籠設置図





操　業　図





6. こおなご漁法の改良について

二枚橋漁業研究会
岡　田　哲　二

私達が現在行っているこおなご漁業は，小型動力船で夜間集魚灯を照らし，敷網で漁獲する方法で，俗に棒受網と称している漁法であり，昭和38年頃大間方面から導入したものです。それまでは無動力船で，8人から10人の　乗り子を必要とする巻網漁法で朝早くから出漁して日中操業し，夜になって帰港してそれからこおなごを夜中までかかって煮て翌朝干すといったものですが，網にも相当の経費がかかり，また乗り子不足にも悩み，身体のつかれることも他の漁業にくらべ大変なものでした。

それが今の漁法になってからは経費も割にかからず，また人員も最低2人でも操業が可能になり，能率的なため，当然収入も多くなりました。操業の際集魚灯を照らし，それに集ったこおなごをとるという点におきましては，大間，風間浦地方の漁法と少しも変ったところはありません。ただこれだけですと別段申し上げることはありませんが，たまたま操業のさい，集魚灯を照らしても，相当みえたこおなごがどうしたわけか灯に集まらず，逆に砂の中にもぐるといった現象にぶつかったのです。これがそもそも漁法改良のきっかけになったのですが，それまでは，集魚灯を照らして，こおなごが集まらないと，そこにはいないものとしておりましたが，砂の中にもぐったこおなごを獲る方法を考えたことにより，漁獲のより増加をもたらすことが出来，好成績をあげましたので，これから，こおなごが砂にもぐることを発見した動機と，これに対しての改良漁法につきまして簡単に申し上げてみたいと思います。

当方で集魚灯による夜間操業が行われるようになりました翌年，私達は岩屋地区の入漁許可を得て出漁しておりました。たまたま私は早目に出港しまして，漁場に着いてまだ日が高く，操業に間があるので，錨をおろし，夜になるのを待つことにして岩屋村前の，水深7・8メートルのところまで船を入れましたところ，なんと，そこには海の底が見えない位のこおなごの大群がいたものです。この調子だと今夜は大漁間違いなしと胸をはずませて待機致しておりました。ところが，暗くなるに従って，沢山いたこおなごの姿が次ぎ次ぎと見えなくなり，集魚灯を照らしても全く集まる様子はありません。付近にいた他の船は，こおなごが移動したものと考え，それぞれ別の場所にこおなごを求めて去りました。私はどうしてもあきらめきれず，それからも1時間程待ちましたが，それでもこおなごは集まりませんので，ようやく決心して錨を上げるにかかりました。その時，錨の爪が砂を起こすと同時に，何かピラピラと光るものが見えました。私はなんとなくそれが気になって，またすぐ錨をおろし，上げ下げしてみますと，何んと，錨が海底に届くたびに，もりもりこおなごが砂の中から出て来たのです。私はこの時初めてこおなごが砂の中にもぐるということを知ったのです。でも，砂の中から出たこおなごは瞬間的なもので，また間もなく砂にかくれてしまいます。その晩はとっさに良い考えも浮かばず，錨の上げ下げを繰り返して瞬間的なのを少量ずつとりましたが，とても満足するような漁が得られず帰港しました。家に帰りまして，この漁獲方法について色々と考えてみました。こおなごが出てくるのはほんの瞬間だけ，これをとるためいちいち錨を上げ下げするのは肉体的にも大変疲れるし能率的でもない。それで考えついた事は，砂にもぐっているこおなごに常時衝撃を与え続ける方法をとれば良いと思い，　それには錨を上げ下げする代りに船で曳いて歩けば良いだろうということです。早速この方法でやってみることにして準備を整え，翌晩出漁しました。やはり明るい中は海いっぱいのこおなごの大群でしたが，暗くなるにつれて昨晩同様その姿は見えなくな

りました。そこで用意して来た300匁程の石にひもをつけたのを持って，砂の中にこおなごがかくれているかどうか確かめるため，2，3回海底に落としてみますと20から30尾程のこうなごが白い腹を見せて砂の中から出てくるのが見えました。そこで直ちに，かねての考え通りに操業を開始しました。この結果は大成功で，この晩は同じ場所だけで満船する程の大漁をすることが出来ました。この漁法は図1のような方法です。集魚灯を照らすと共に先ず錨を下ろすのですがこの際錨網は船が前進しても錨が効かない程度に延びをやり，トモの左舷にゆわえます。このようにして集魚灯を照らしたままで取り舵いっぱいにして船を前進させます。そうしますと船の回る範囲はあまり変らず，トモ，オモテだけ動くことは皆様も想像できることと思います。集魚灯は左舷につけていますが，右舷の場合はこれと全く反対の方法でやれば良いわけです。このように，集魚灯を中心にトモを振り回しますと，錨爪が砂地を掻きまわして，こおなごが次ぎ次ぎに出て来て集魚灯に集まります。ここで注意することは，出て来たこおなごは比較的短時間でまた砂にもぐることが多いので，船をひと回り位させたところで頃合をみてストップすると同時に網を突っ込みます。1回網を上げるとすぐまたこの方法で2回目の操業をします。同じ場所で何隻もこの方法で操業しますと，各船共に満船というわけにはいきませんが，最初の操業を一旦休ませ，別のところで操業した後また元の場所に戻ってきますと，再びこおなごが集まっていることがありますので，一晩のうち何時間か間合を置いて2回は操業してみることも大事です。なお，今までの経験では，小羽は砂の中にもぐることはなく，中羽以上のものに限られるようです。

私達グループはこの漁法を利用してからは以前よりまさる豊漁をたびたびしております。また，この漁法と共に，私達は船首に，ライト，またはそれに代るものを装備しておりますが，こおなご漁業は皆様もご承知のとおり，最も岸近い所で操業するため岩礁とか定置網などに特に注意が必要でありますので，これを使用して航行の安全，事故防止に役立てております。こおなご漁業を営む皆様にはおすすめしたいと存じます。

次に，こおなごの水揚高は毎年大きな差はございませんが，参考までに，昨年の水揚高と経費，収入などをおしらせしたいと思います。次の表をごらんください。

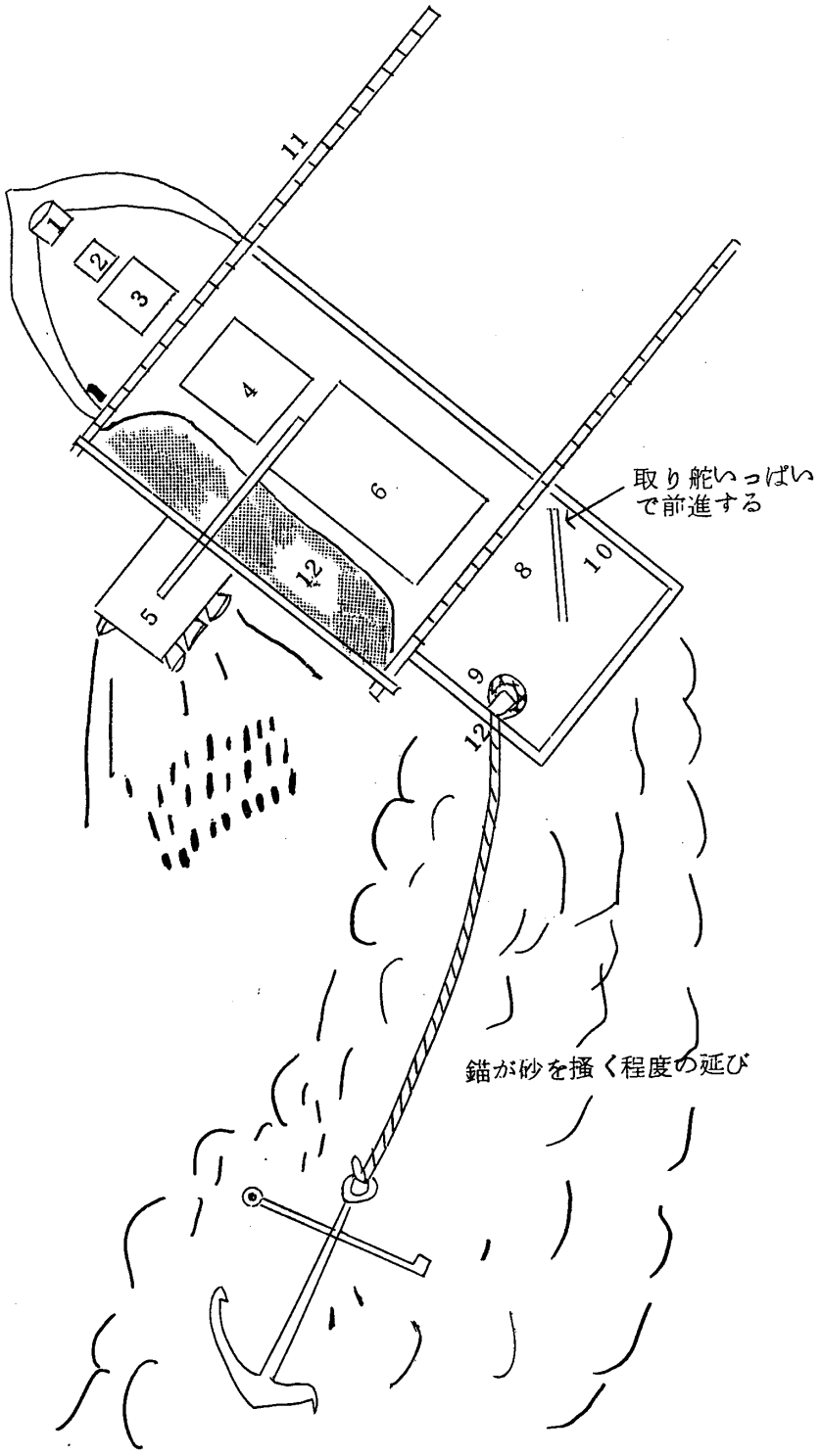
また，私達は漁獲したこおなごは煮干しで出荷しておりますが，加工方法の改良にも心がけ他所にくらべて遅ればせながら，昨年初めて重油バーナーを取り入れて，今までよりも能率的に処理ができて品物も良くなり，身体の疲れも早く取ることができるようになりました。今後は乾燥方法について研究し，より良い製品作りと能率化を図りたいものと考えております。こうなご漁業は短期間の割に収入が多く，いか釣漁業に次いで欠かせない重要な漁業です。

最後に，私達は一つの漁業に限らず，周年操業の確立と，経営合理化を目ざし，これまでも県はじめ地元町，漁協，普及員など皆様方のご指導のもと，各種研修会などに参加して技術の習得などに役立てておりますが，ここで改めてお礼を申し上げます。今後共皆様方の一層のご指導を心からお願い申し上げまして私の発表を終ります。

図 1

こおなご漁法図

（集漁灯左舷の場合）



説　明

1. ライト
2. 船首タチ
3. 船員室入口
4. ハツチロ
5. 集魚灯
6. 機関部
7. 舵
8. 舵ヅカ
9. トモタチ
10. トモタチ
11. 竹竿
12. 網

長宝丸

和年42年度こおなご水揚高精算書

（昭和42年5月1日より6月10日まで）

乗り子の収入		船主経費と収入	
総水揚高	726,450円	機関燃料	15,000円
大仲経費	84,242円	竹竿	3,500円
差引	642,208円	網の補給	1,200円
乗り子の分（5割）	321,104円	其の他	10,000円
1人当り収入	107,035円	計	29,700円
		差引収入高	291,404円

大仲経費の内訳			
費目	数量	単価	金額
燃料（重油）	ドラム 25	円 2,500	円 6,250
塩代	俵 18	540	9,720
人夫賃	人 415	900	37,350
箱詰費			9,652
電球	ケ 18	850	15,300
その他	こおなご運搬費など		5,970
計			84,242

7. いしなぎ釣漁具の改良

三厩漁業研究会
安保森一

はじめに

私達の住む三厩は津軽半島の突端で，早くから研究グループを結成して，主として一本釣漁業を行っているのは皆さんご存じの通りであります。

私達の地区でのイシナギ漁は，12月から2月にかけての冬場の漁期と，5月から7月に産卵のために接岸するのを釣っている夏漁と年2回の漁期があります。

夏漁は漁獲されるイシナギの鮮度が低下し易く，遠方送りが出来ないので価格も安く，重きをおかれていませんが，冬場の漁期は遠く富山，高岡等の県外出荷がほとんどで，価格もよく大きな漁業の一つになっております。

このイシナギ釣は従来古くより龍飛岬沖を漁場として行われて来たわけですが，ヤリイカをエサとして来た関係で，本村でも比較的エサの入手し易い宇鉄から龍飛地区の漁民によって行われて来たのです。4～5年前より龍飛地区の研究グループ員の指導で私達もイシナギ釣を行うようになり，釣具の研究も行いどうにか人並に釣れるようになりましたので，その経過をお話してみます。

（研究の経過）

本村に於ける冬場のイシナギ漁は，龍飛岬沖の水深100～150 mのところで行われるわけで，日本海からの季節風を真向にうけて時化が多く，且又潮流の速い地帯であります。

それで昔は釣糸で苦労したものですが今では化学繊維によって解決しましたが今度は今まで死魚をエサとして来たのですが，活魚をエサに使用するようになりました。

同じ活きたヤリイカをエサとしても，活力のよいエサと劣ったエサではイシナギの喰いつきが全然違います。

そこでヤリイカをエサとして活力を長く保つにはどうしたらよいかという事になり，(1)の様な釣針からオモリ玉のつかない，(2)の釣針で数年間行われてきました。

然しこの方法も潮流の速い海底ではエサが廻って安定しないので喰いがよくないのではないかという事で，38年に龍飛グループで研究されて実施されたのが，(3)の方法であります。

この方法はエサのヤリイカが潮流の速い100 m以深の海中でいかにしたら最も自然に近い状態が保てるかを目的に研究されたもので，操業の経験から或る程度の重さが必要だと考えて様々に実施した結果は釣針の元に5匁程度のオモリを付けた方が一番よい結果が得られたのです。

この方法で38～39年は相当の漁をしたものです。

然し40年になり回遊の関係か漁も少ない状態が続いた結果，イシナギのエサはヤリイカでなければいけないものだろうか。外にまだよりよいものがないだろうかと云う事がグループ会合の課題となり，イカ以外の小魚をエサにして研究する事にしたのです。

そこで，ソイ，アイナメ．ヒラメ等の活魚をエサに使用して見た結果は，どのエサでもイシナギが喰いつくけれども，特にヒラメは一番よく，ヤリイカ活魚をエサに使用したものより，多く釣れる事が出来ました。

ヒラメは釣糸を曳いていても，海中では活力が一番強く，最も自然に近い状態でおるからではないかと思われます。

そこでヒラメが一番つかれない方法はどのような釣針の付け方をしたらよいかを研究した結果は，(4)のように釣針をつけた方がよいと云う事を知りました。

即ち，イシナギは魚体が大きいので，比較的大きな釣針を使用しますので，そのままエサがけするとエサの損傷が大きく，活力低下の原因となるので更に孫針をつけて孫針によってエサをとめる方法であります。

これによってエサのヒラメに大きな損傷を与える事なく，長く海中で活力が保てるわけです。

（結果について）

実際にこの方法で行った結果は今までヤリイカをエサとしていた時より，イシナギの喰いつきが非常によくなり，現在はほとんど全船がヒラメをエサに使用するようになりました。

ヒラメもはじめは 500 g 程度の小型のものが使用されましたが，エサが大きければ大きい程よく釣れるようであり，今では 1 kg前後の大きさのものが多く使用されています。

今までお話したように数年間にわたり釣具を改良した来た結果は，漁獲高も年々上昇しており，漁協の取扱高は次のようになっております。

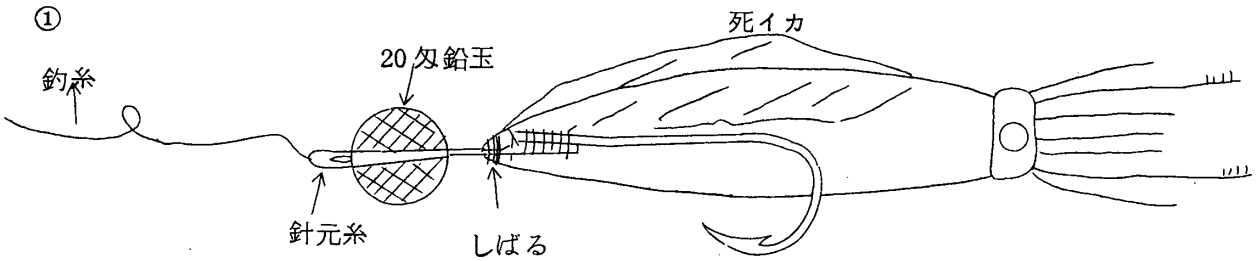
（三艇漁協取扱分のみ）

年　度	漁獲数　量	漁　獲　金額額
37 年	7, 343 kg	1, 044, 084 円
38 年	20, 132 kg	2, 173, 110 円
39 年	53, 657 kg	7, 336, 788 円
40 年	21, 379 kg	3, 805, 224 円
41 年	61, 395 kg	8, 306, 351 円

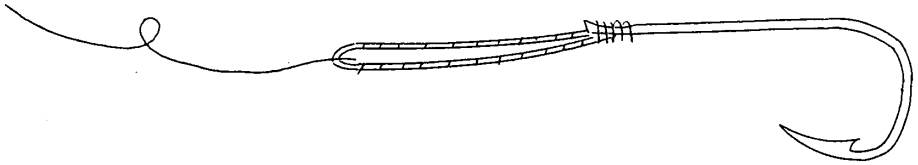
以上で私の発表を終ります。

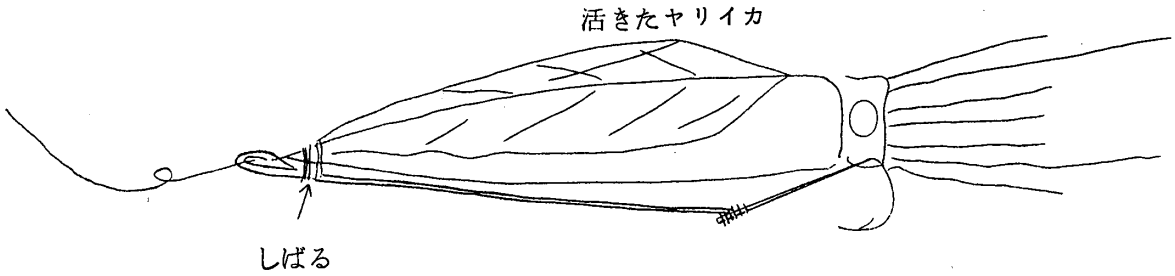
従　来　の　漁　具

①

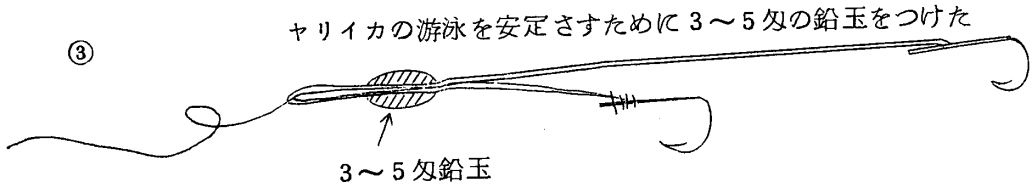


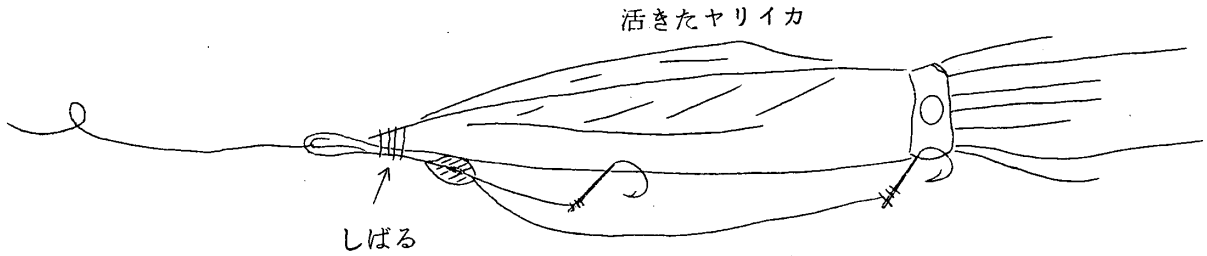
②　活きたヤリイカを使用して鉛玉をつけない

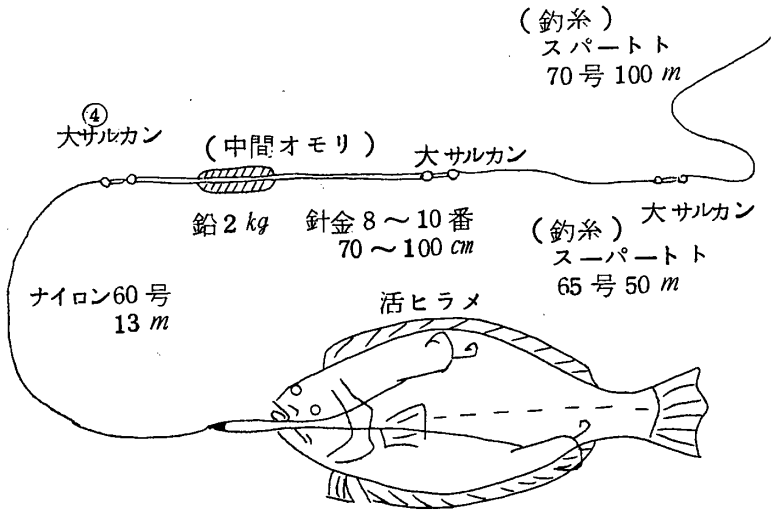


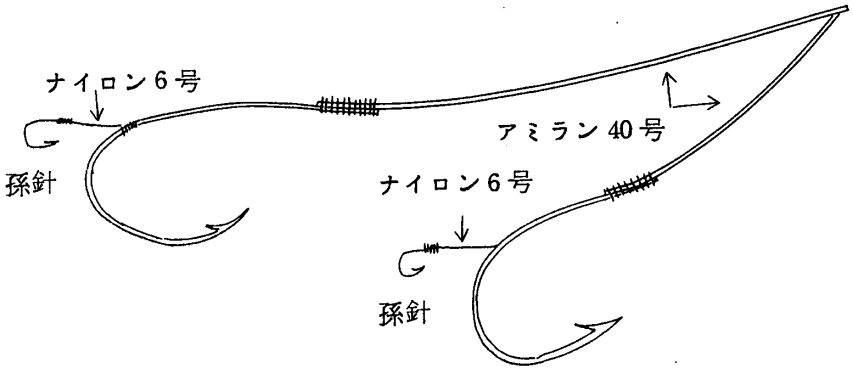

活きたヤリイカ
しばる

③


ヤリイカの游泳を安定さすために3～5匁の鉛玉をつけた
3～5匁鉛玉


活きたヤリイカ
しばる


（釣糸）
スパートト
70号 100 m
④
大サルカン
（中間オモリ）
大サルカン
鉛2 kg
針金8～10番
70～100 cm
（釣糸）
スーパートト
65号 50 m
大サルカン
ナイロン60号
13 m
活ヒラメ


ナイロン6号
アミラン40号
孫針
ナイロン6号
孫針

8　私達グループの歩み

佐井漁業協婦人部原田支部　東　出　み　つ

私達の住んでいる原田部落は下北半島の西部，佐井村にあり，本村の北方約4Kのところにあります。津軽海峡を経だて丶北海道大島地区に面しており，北部は大間町と隣接しているところです。世帯数101戸，人口551人，兼業農家の構成部落であります。

佐井村漁業協同組合原田支部は正組合員74名，準組合員18名，年生産取扱高約2,500万円及び年農産物取扱高約300万円となっています。

（婦人部発足）

昭和33年度に原田漁業協同組合の指導の下に私達漁業協同組合婦人部として発足いたし貯蓄を目的として会員78名をもって構成されました。当時の年令層は50代以上が多かったのです。其の后従来の婦人会と婦人部員の関係等がありましたが話し合いの下に婦人会員は年令の高い方，婦人部は年令の少い方とわけて現在は漁業協同組合婦人部員は40名を以って構成され，婦人会と婦人部の円滑なる運営を計っております。婦人部も貯蓄を目的として発足しましたが，事業，教養と広め組合指導のもとに行われるように成りました。私達の部落は漁村でしたが昭和25年以降の海そう類の減少により，生活も困窮し遂に出稼部落と成ったのです。その中にあっての貯金目的でしたので貯金高も少金額でした。昭和38年度には60万余と成りましたが部落の飲料水の改善を行う事になりましたが設置費，自己出資金等が無く中止の状態に成った時に，婦人部の貯蓄利用によって達成出来る事が分り，会員一同の意向により，目標金額に達しなくとも部落一同のために成るのなら利用した方が良いとの結果論にいたり，飲料水事業が達成されたのです。少かのお金でも貯蓄し部落全体のために役立った事に対してその尊さを痛切に感じたのです。現在は班制度として毎月1, 5, 10, 15, 20, 25日を貯金日と定め実施して居ります。

（養殖事業研究）

漁業協同組合の事業としてコンクリート面のり養殖事業がはじめられた時に，その管理方を私達グループで行い現在も実施致して居ります。初年度は良好でしたがその后は減少するのみでした。普及員の指導のもとに手入等を行いましたが期日の関係と出来なかったのです。今年度になってようやく，手入の時期，採取方法等とわかって参り成績も良好で一同喜んでおります。簡単に考えていた事業も実施段階では相当の研究が必要である事が分りました。冬期間の収入を考えると現況であれば漁業を中心とし，岩のり，ふのり等，又養殖事業計画を立て行われてこそ道が開ける事と存じています。幸い今年度は男の人達の研究部も発足いたしましたので協力事業が出来ると存じています。

（農事研究）

漁業不振により生活安定を期すため部落として水田開拓方針をたて，事業実施と成りました。経済的に苦しい時の事業計画であり，家庭内にてもあらゆる点において経済し日夜の苦斗した過去8年間の苦労は忘れない連続でした。お互の励ましの言葉，平傳等を致し水田3,500アールの完成を見たのです。農業普及員の指導のもとに田，畑の農事講習会，生活改良普及員の指導のもとに食生活の改善，家庭経済の講習等を行い又冬期間の婦人学級を実施してもらい教養を高める等，予算の範囲内で出来得る事を行っております。又特に改良普及員にお願い致し料理講習会等を実施して載き感謝致しております。私達の目的達成までは各自の健康が大切であり今後も続けたいと思っています。

（目標希望）

原田部落の今後としては農事開拓も終り，収入の増大を計るためには漁業の研究及び経営の合理化が必要だと考えています。現在の出稼部落を急激に改善する事は出来なくとも長期計画で行えば出来ると思っています。又家庭内の台所改善も同様と思います。

経済的にも一番苦しい時に生るために水田開拓しお互の協力，理解力，努力の必要性を痛切に感じ又実

行して今まで参りました経験を生かして家庭の主婦としての努めを果したいと思います。昭和42年度の調査結果をのべて見ますと下図の通りです。

漁業協同組合原田支部1戸の概況（74名調査）				一日平均漁業従事者
無動力漁船数	91隻	人口 15才以上	男149名 女127名	185名
船外機	19〃	15才以下	男 64名 女 60名	
小型動力船数	3〃			
計	113〃			組合員人口率724%

約平均収入金額			
	漁業関係	2,500万円	率 36.3%
	農業関係	1,984万円	率 28.8%
	その他	2,400万円	率 34.8%
計		6,884万円	

一戸平均約93万円の総収入高と成っています。

漁業の主たる生産物は昆布，若布，小女魚，槍いか等です。農産物は水田の3,500アール1,900万円，畑地4,800アール主なる物は菜種，馬鈴署，大豆，小豆，ビート等であります。調査の結果改善すべき点として，漁業収入の増額を50%として，農業収入を35%，その他15%と致したいと考えています。部落の生活安定は総入金額一戸平均135万円以上でなければ安心出来ないのです。男の人達は再び部落発展のため蓄牛計画を立てています事を聞いていますが私達は今後益々家庭計画を立てて行かなければならないと考えています。部落構成としては，漁農林蓄，等の多角経営の達成後でなければ生活の安定を期することが出来ない地域であり，今後の研究果題も多く又難かしい事柄が続くと存じています。

婦人部員40名，平均年令31才の若さですが会の向上発展に意欲をもやしています。原田漁業協同組合婦人部の名称より，昭和40年以降は組合合併により，佐井村漁業協同組合原田支部と名称が変りお互い助け合う婦人部員も佐井村全員と成り心強く又漁業協同組合よりの指導も受ける率も多く成ってまいりました。皆々様の計画に比べれば弱少ですが希望のある明るい村造りを願って進んでいれば皆々様の今までの教導に感謝いたすと共に何卒今後共宜しくお教等，御援助の程を御願い申上げます。以上とりとめのないことばかり申上げ恐縮と存じますがこれで終らせていただきます。

9 「我が部落に於ける観光漁業の将来性について」

田野沢漁業研究会　山　本　正一郎

1 部落の概要

私達の田野沢部落は，西海岸深浦町の海岸沿いにある戸数113戸の小さな部落で，この中漁家が68戸あり，その収入の比率は漁業が44％，農業27％，出稼21％となっております。また漁船は，無動力船50隻，動力船3トン未満の船が22隻，3トンから5トンまでの船3隻，計75隻で，漁業の操業形態は第1図に示した通り，1月から4月までは，1年間の漁獲量の過半数を占めるヤリイカ漁，そして5月から8月までは，ワカメ，エゴノリの海藻採取やメバル一本釣が主な漁業です。8月に入ると多少の漁獲はありますが，漸次漁がなくなり，翌年の1月頃のヤリイカ漁までは，いわゆる漁閉期に入るため，8月になると，我々の仲間の多くは，家庭をあとに関東，関西方面に現金収入を求めて出稼に行く人がめだち部落の中は次第に寂しくなっていきます。

この漁閉期対策については，これまでに町の理事者の間でも出稼に変る対策がいろいろと考えられているようですが，まだこれといった良い案がない状態のため，これまで我々，漁業研究会員も，集まる度にこの問題について，さまざま話し合い，特に11月，12月の冬場の様に毎日，時化の続く時期はともかく，夏から秋にかけての8月から11月までの3ケ月間でも，なんらかの漁閉期対策がないものかと，毎年頭を痛めてまいりました。そして一時は，この頃に地元沖合を廻遊するブリ，マグロを獲るための一本的の漁法を，先進地へ出向き，技術を学び取り漁具を導入してみましたが，我々の技術が未熟なのか，漁具が地元に合わないのか，再三の研究改良にもかかわらず，その成果をみるに至らず，研究会員の気持も沈んでいたのですが，昭和40年のある日，県の指導機関の方から，兵庫県における観光漁業の話を聞き非常に効果を上げており，現在県内においても実施しているところがあるということから急に明るい希望が湧いて来ました。

2 取り上げた動機

① 観光漁業を発展させるためには，多数の釣客があることが，第一の前提ですが，本県の西部海域は秋田県境の須郷崎から鰺ケ沢にかけて，殆んど岩礁地帯（64㎞）で，特にこの中に位置する，深浦町も海岸線が41㎞もあり，屈曲に富み奇岩がいたるところ海面に浮かび男性的な景色で，県立公園に指定されております。特に私達の部落のすぐ近くには，千畳敷という，西海岸唯一の観光地を，ひかえているため，一般観光客とゝもに釣人も，以前から相当数訪れており，最近は，その数が釣りブームの波に乗り多くなったりつゝあります。

② 最近の沿岸漁業，不振のためか，子供達は中学校を卒業すると，そのほとんどは漁村に残らず都会に出てしまうため，年々漁民の老令化が自だつ傾向にありますが，この点観光漁業は，労力をあまり要しないので，ある程度高令者でも営むことができる。

③ 毎年漁獲の変動が激しく，また漁閉期があるため，生活の安定性がなく，このため，出稼ぎ等により，そのほとんどが他産業で働いているが，漁業が経験のない他産業に入って働くより，漁業という自分達本来の職業を生かして行うことができる。

④ 地先海域には，タイ，スズキ，平目等の釣人の喜ぶ高級魚が豊富である。

⑤ 部落地先の浅海部一帯は甘盤で出来ており，こゝには釣の好餌である岩虫が多数生息しているため，釣餌がいつでも安価に手に入る。

以上の5点より私達研究会員は，田野沢部落にとっては唯一の沿岸漁業振興対策として十分可能性があることの自信を深めました。

3 実施経過

そこで，私達は観光漁業を行うための会合をもち話し合いを行った結果，昭和41年から2年間は

まず研究段階として昭和41年は取りあえず漁業研究会員の中からこれまで年間を通して漁業に従事している5人の人に行ってもらうことになり実施しましたが，思ったより釣客が少なく，1隻当りの8月から11月まで3ケ月間の収入は3万円程度でした。その原因として考えられることは

① 観光漁業を行っていることが，宣伝不足のため，ほとんどの人が知っていなかったゝめ。

② せっかく釣客が来ても，乗る船がなかったり，運営面において円滑に行われなかったこと。等があげられました。

そこで，昭和42年からは，ポスター等で宣伝を行ったり，観光漁業を行う船も5隻から8隻に増やし，運営面においても，他の観光漁業を行っている地区の運営方法を参考にして改善をしましたところ，一段と客足も増え，1隻当り平均10万円の収入を上げることができました。

以上実施研究してきた結果，次のことが明らかにされました。

① 力仕事でないため体が疲かれないことから，家に帰ってから，他の仕事を行っても非常にはかどること。

② 時間が決まっているために，ある程度一日の仕事の計画を樹てることができ，合理的に，仕事を行うことができる。

③ 地先の海に経験の深い漁師が，付き添って乗るため，素人同志が海に出て釣りを行うことよりも，安心して釣れると釣客に喜ばれること，またこれは，海難防止にもなること。

等があげられてました。

4. 今後の問題点と将来性

二ケ年間研究段階として観光漁業を実施した結果明るい見透しを得たことから，今後は観光漁業を発展させるため，田野沢部落の全漁民に呼びかけ組織を大きくするとゝもに，観光漁業へ正式に第一歩を踏み出すためにも，漁船の整備を行い一刻も早く観光漁業組合を設立し，釣客がいつ来ても良い様に，地元の受け入れ体制を確立し，また県観光漁業協会に加入すること。更には町役場，町観光協会にも協力を願い県内は，もとより将来を見越して県外にも宣伝し，組織的な運営を図ることが第一に考えられます。

次に西海岸には二級国道101号線が海岸沿いに走っていますが，この道路は県内でも有名な悪路であるため，最近マイカー族が増えた割には，あまり深浦地方まで，乗り込んで来ない現状ですが，現在のところ，舗装が順調に行われており，こゝ2～3年中には秋田県境まで舗装されるとのことですので，将来は秋田県側からの釣客も自家用車を利用して相当数，来ることが予想されます。

また現在，弘前市と西海岸の岩崎村とを結ぶ道路工事が進められていますが，この道路の完成によって，一層客も入って来るものと期待しております。

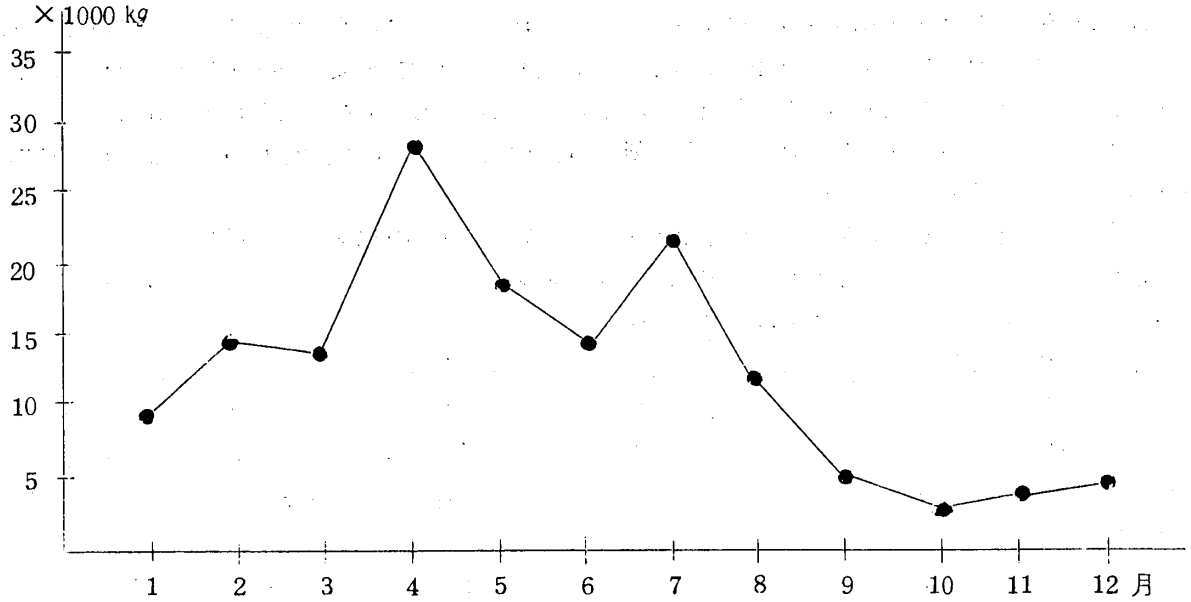
将来観光漁業発展の過程においては，西海岸の名物であるタイ，ブリの大型定置の網起し状況を，一般観光客を船にのせ見せ，ただ釣客のみではなく，婦人や子供にも楽しんでもらおうと考えております。

いづれにしても，観光漁業が漁閑期対策として，漁村繁栄の足がかりとなることを確信し，漁業研究会員が一段と協力し，この事業が地元に根をおろすよう育てゝゆきたいと思っております。

第1図　昭和41年，1ケ年の漁業状況

漁種＼月別	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
ヤリイカ	←→	←→	←→	←→								
ヒラメ				←→	←→	←→	←→	←→	←→	←→		
メバル				←→	←→	←→	←→	←→				
ワカメエゴノリ				←→	←→	←→	←→	←→	←→			

第2図　月別漁獲量（過去3ヶ年平均）



第3図　昭昭和41年の月別操業（漁家68戸中，28戸について調査）

月　　別	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
割　　合	% 10.9	% 11.6	% 11.2	% 12.3	% 12.9	% 12.0	% 12.6	% 12.6	% 3.3	% 0	% 0	% 0	% 100.0

10　私達の研究会の活動

脇野沢村婦人養殖研究会　須　藤　き　く

私達脇野沢村婦人養殖研究会は，発足してから7年目を迎えました。村の主産物であったタラの不漁によって，夫や息子達が季節的に旅に出て働くようになってから，私達は，夫や息子達の留守家庭を守って農業に日雇にと，仕事に追われて毎日を過しております。

発足当時から，最近まで，地元の産業を何とか建て直すことが出来ないものかと，フノリ養殖や農業の栽培技術の向上に力を入れて参りました。しかし，生産を高め，地元の産業を建て直すということは仲々むずかしく，漁業の方では，すべて失敗してしまいました。また従来やって来た購買や貯金も，取扱い金額が多くはなっていますが，今後飛躍的なノビは期待出来ないように思われます。

研究会員一人一人についてみると，私達出稼ぎ家庭の主婦は，夫や息子達と直接話し合う機会が少なく色々な事態にぶつかった時には，ほとんど自分で決めてしまわなければなりません。また，旅に出ている夫や息子達と，日常生活におけるへだたりが出来たような感じがしています。

このような状態のときに，私達は，婦人学級という学習の場があることを知りました。そこで，私達は婦人学級を開設してもらおうと県や村の社会教育関係機関にお願いしましたところ，幸にして，関係機関の深いご理解とご協力のおかげで，開設の運びとなりました。開設に先立って，私達は村教育委員会指導のもとに，準備委員会を組織し，課題の選定や学習日程等を決め，同時に学級長，副学級長を選びました。次いで，学級生の住んでいる町を4つの班に分け，各班に班長を置いて主に連絡係をしてもらっています。

学級の運営は，準備委員がそのまま運営委員となり，委員会を組織して行っています。

学習課題は，開設の時の状態から，村の産業，出稼，子供のしつけ，その他生活のすべての事柄を正しくみつめ，正しく押し進めることを目標として，私達に身　近な問題を取り上げました。それは，「社会と家庭」，「家庭の生活設計」，「家庭経済」，「労働，余暇と健康」を主題として学習しています。

学習する日は，皆んなが集まりやすい日と時刻という事で，月の15日と24日の農休日にして夜7時から9時までという予定でやって来ました。

学級生には，遅刻しないよう呼びかけておりますが，家事や仕事の都合で，遅刻してしまい，そのまゝ出席しないで，その次の学習日に出席しずらいという事が出て来るち困りますので，遅刻しそうでも，都合のつき次第出席するようにしてもらっています。

学級の開設して間もない頃は，鉛筆を持って学習するという事がおっくうで，出席をしぶる人がおりましたが，学習の日程が進んでくるはつれて，メモをとる人も出て来ましたし，話合いの時に，めったに自分の意見を言わなかった人が。進んで自分の考えを述べるようになったという人も出そ来ました。

また，学習のあいまの休けい時間には，歌をうたったりして堅くなりがちな空気をやわらげる工夫もしています。

私達の良い点を考えてみますと，皆が同じ出稼ぎ家庭の主婦であるために，互に気心が知れている事だと思います。このことから，割合いに集まりやすいのですが，開講式に出ただけで，その後ずっと欠席しているという人があり，これらの人達の出られる方法を考える必要を感じています。

すでに12回の学習を終えて感じます事は講師の木村先生のお話の中にありました。「うなずく，物を考える。物を言える。書ける，そして実践に結びつく婦人学級」という言葉で，私達は，この言葉を出来るだけ多く実行に移して行きたいと考えております。

以上，婦人学級の開設とその経過のあらましを述べて参りましたが，実践に結びつく活動が，私達のねらいであります。これが今後の課題となっているのですが，もう一つこゝで述べておきたい事がございます。それは，昨年7月に，むつ地区農業改良普及所に，漁家担当生活改良普及員が置かれ，私達の住んでいる脇野沢村本村が，濃密指導地域に指定された事です。今まで私達は，生活改善を漠然と考えていたのですが，それをはっきりした形で示して下さる事と思います。そして，今まで行って来た農業講習，貯金講買，といった事業も，一本の目的をもったものになると期待しています。

私達はこのような事態に対処するために，研究会員の結びつきを一層強いものにして協力してやって行こうと思っておりますので関係機関各位の一層のご指導をお願いして私の発表を終ります。

11　わが家の生活設計と漁協婦人部活動

上北郡六ケ所村
泊漁協婦人部　中　村　およね

わが家の副業についての体験を発表させていただきます。私の家は上北郡の最北端で大平洋に面し中学生のイカ釣で問題となった零細な漁村にあり家族は私共夫婦と24才の長男を頭らに5人の子供がおり沿岸漁業に従事するかたわら副業として板金工と田畑5反歩を耕作しております。

終戦時，私は幼い子供を2人かかえて途方に暮れているところに主人が復員して来ました。2ケ月程休養してから漁業に従事したが，長い軍隊生活で身心共に衰弱し毎日のように船酔するようで他の人にくらべると漁獲量も半分しかありませんでしたが親子4人揃って正月を迎えることを喜び合いました。

でも野や山にフキの塔が出始める頃出稼する者漁業に従事する者，部落内は活気づいてきましたが主人反対に，ただぼんやりとふさぎ込む日かずが多くなりました。漁業に自信をなくした主人に何か適当な職業がないものかと方々探しているうちに，主食として配給しているトウキビに目が付きました。これをドンキビに加工するには小資本で技術も大して必要としないし内職としては手頃のものであると考え2人で相談し主人は機械購入に奔走しました。恥かしい事ですが当時私達の持金6,000円しかなく機械が4,300円で手元に千七百円の残金でもし失敗すれば親子飢死しなければならない有様でした。数日後機械が入り早速試運転を始めたが，初め考えたような簡単なものでなく技術を必要とすることがわかり，心配になってきましたが，何んとか成功させなければと主人と共に一週間深夜まで機械とのとっ組み合いでした。その時の苦労は今でも忘れることが出来ません。加工料は1件10円で朝6時頃から夜10時頃まで仕事が続き1日800円の収入が得られるようになりました。

この副業で自信を取戻した主人は何時の間にか船酔もなくなり漁業にも意欲的に取組むようになったのであります。

ところが食料事情が良くなるにつれてトウキビの配給もなくなりこの副業も2年半で終りとなりました。当時はイカが豊漁でしたので副業がなくても一家を支えるだけの収入はありましたがイカ釣を主体とした漁船漁業だけでは，その浮き沈みが激しく全く不安定なものでした。1年不漁にあったらどうなるだろう何か転業を身につけて不漁時の切り抜け策を真剣に考えなければならないのではないだろうか。主人は元来，手先が器用でしたので今度は板金工を志し参考書を読んだり，紙を切り折りして勉強を始めました。私はこの様子を見て，ずぶの素人でしかも中年になってから師匠なしで板金工になれるものだろうかと不安でした。その頃借屋住いだったので子供達のことも考えて家を新築することを計画していました。材料は全部営林署から払下していただき28年8月着工，トタン工事は主人一人でやりました。屋根で金槌を振う主人の姿を見上げた時，何事も一心を通せば出来ないことはない。私も負けずに頑張らなければと強く心に誓ったのです。

私の部落はイカを主体とした純漁村で総収入の90％は漁業所得で前にも申しあげた通り万一の不漁に備えて田畑の耕作を必要と考えました。泊地区は住家も山間いに建築されている状態で田が少ないところから陸稲の作付を試験的にやって見ました。この年は天候もよく反当り3俵の収穫があり試験作付としては上々の出来ばえで，しかも泊地区では私が初めてでしたので部落内は勿論のこと隣村の白糠からも種モミの注文が殺到し収穫量の半分を皆んなに分けてやりました。今では，ナタネ，馬鈴薯畑を陸稲作に切換え殆んどの人が作付するようになりました。

その頃から主人の板金工としての副業も伸び29，30，31年の不漁時にも漁師専門の人達よりも経済面ではどうにか楽な生活が出来たように思っております。

又子供達の教育についても，高等学校まで進学させたいと思いましたが，一番近い学校でも片道34粁もあるうえ，交通の便が悪く下宿させなければ通学が出来ないので，経費の関係上私供のような家庭ではあきらめざるをえないのであります。せめて中学校の義務教育だけでも満足に卒業させたいと思い，他

所の子供達が夜間イカ釣に出て家計のたしにしていても，私供は，一度も就業させず学校に通わせました。

それでは，漁業をやめて板金工を本職にしたらよいのではないかとお考えの方もあると思いますが小さな田舎村では，月給取り以外の職人で毎日働ける仕事は無く工賃にも限度があり漁業なくして私達の生活が成立しないのであります。

少しでも豊かな家庭を築くために前向きの姿勢で努力しなければならないと思っているやさき，普及員さんと漁協のご指導もあって，38年に私達は漁業婦人部を結成をして，その部長として私は選ばれました。

活動としては，漁協貯金，日用品の共同購入を手掛けました。生活改善では一番問題となった厄払行事もどうにか軌道にのり又〃いわのり〃の増殖や磯掃除なども毎年実施し婦人部活動も皆さんに見とめられるようになりましたので今年の総会で家庭の都合もあり部長を辞退しました。

でも婦人部活動にはかかさず参加しています。今年はさらに漁協からの要請もあり磯監視も行なっていますが，これらの行事は，協同精神を養うと同時に漁業生産の向上と家庭生活に少しでもプラスになればと思っております。

終わりにあたりまして私は強く申しあげたいのは私達は主婦として社会の情勢に即応しながらも，わが家の家計を整え生活の安定を確立することが知らぬ間に明るい幸福な家庭を築ずく基となると思います。そのためには漁閑期に水産物の二次加工，三次加工も研究しなければならないと思いますし又植林なども真剣に考えなければならない問題だと思います。

今後，これらの問題も婦人部活動の中に取入れて検討し関係機関のご指導を受けながら進んで行きたいと思っておりますのでよろしくお奉いします。

大変つたない体験を発表させていただきましたが，これをもって終ります。